

# 物質と意識

池田 昌昭\*

Matter and Consciousness

Masaaki Ikeda \*

*Received June 22, 1998*

[キーワード] : 物質, 意識, 物自体, 観念論, 感覚器官

## 目 次

1. 物質と意識との関係
2. 心身と心脳問題
3. 一次性質と二次性質
4. 感覚と観念
5. 原因と結果
6. マッハの物質否定
7. 物自体と現象

## 1 物質と意識との関係

唯物論哲学の根本問題は物質と意識の関係を明らかにすることであり、唯物論哲学は物質を第一義とし、意識は物質の反映であるとする。すなわち唯物論哲学は、人間の意識は人間社会を含む物質的外界環境からの反映であり、外界環境から得られる像であるという観点を基礎に措くのである。では次に物質とは何かということである。そして物質とはわれわれの周囲にあるところの自然界の空気や、水や土地や月の光や岩や草木等々のことである。また唯物論は広義にこの物質を解釈し、人間が生きる社会もしくは社会機構を第一義的世界と解釈する。そのポイントは次のようなことである。

- ① 社会を含む物質世界は人間の意識の外に存在し、人間意識に影響を与える客観的存在のことである。つまりそれに該当するのが自然界であり、人間社会である。
- ② またこの自然界は意識を持たないのである。あくまでもそこには物質法則が流れているのである。物理法則、化学法則、生物法則等の世界なのである。

---

\* 国際交流センター  
International Exchange Center

③ また人間社会においても言わば社会科学の法則として、経済法則である生産・流通法則、金融法則等が流れているのである。人間関係においても、言わば法則とも言える言語やコミュニケーション活動が行われているのである。

さてこのような外界環境存在にたいして、では意識の特徴とは何であろうか？ それは次のようなことと考えられるのである。

① 意識は外界事物の反映であり、像であり、模写なのである。

なぜならそれは人類の発起源に遡ることができる。人間が初期人類の段階にあったとき、たとえば外敵から身を守る場合を想定してみよう。獐猛な動物が接近してきた場合、まず初期人類の眼や耳が動物の接近を感知する。これは感覚器官のはたらきである。そして動物が接近してきたという電気信号が初期人類の脳神経細胞に伝えられる。そこで脳神経細胞は動物から身を守るべく身を岩陰に隠したり、弓矢等の武器を手にとってその動物とたたかうという具体的な行動を取らせるのである。つまり初期人類のころから人間はみずからの生存のためには、どうしても外界の動きをより早くより正確に眼や耳を使ってキャッチし、適切な行動を取るという生存の原理から外界反映能力を身に付けていったのである。

また暑さから身を守るためには水辺に行ったり、また寒さから身を守るためには毛皮を身にまとうとかいった具体的な生存の方策を取っていった。これらの生存のために、身を守るための行動の基礎には、外界環境の暑さや寒さといった外界環境の変化を読み取る初期人類の感覚を含む反映能力があるのである。このように初期人類のころから人間は反映能力を言わば生存の手段として一歩、一歩みずからの脳内で向上させてきた歴史なのである。これがこんにち人間の反映能力と呼ばれているものであり、人間の意識が外界の像であり、反映であるということの生物学的根拠なのである。

ところで外界世界の動きを読み取ることができるだけであれば、他の動物や鳥類・魚類と何ら変わるところがない。しかし人類は、その本能的な反映能力を能動的なものへと高めていったのである。つまり外界世界を的確に読み取ることにより、適切な能動的行動を積み重ねていくことにより、人類は他の動物に比して主体的意識を形成していったのである。意識の発生はさらに脳神経細胞のはたらきを活発化し、活発化した脳神経細胞はさらに明瞭な意識を生み出していったのである。

② つまり外界物質界が第一義であり、意識は第二義的なものなのである。

初期人類を見ても明らかなように、最初のころは初期人類にあっても反映能力は言わば微弱なものであったと思われる。ただし外敵とたたかったり、食糧を手に入れたり、寒暖から身を守る術を考案していくといった生活体験を経るに従い、人間は反映能力を向上させていった。すなわち眼はだんだん良くなり、耳も音を聞き分けられるようになり、意識も徐々に明確になり、集団生活のなかでやがてコミュニケーション手段としての言語が意識の現実型として発生していったのである。

③ そしてこの意識のはたらきは最近の脳科学の解明により、脳神経細胞物質のはたらき、産出の結果であることが分かって来ている。意識が脳内物質の産出の結果であるということは、意識は物質的なものであり、実在的なものであるということが分かるのである。

次の問題は、では意識は完全に物質かという問題である。このことについては、意識は脳神経細胞の物質的なはたらきによって生ずることは間違いないのだが、ではすべてを物質に還元

して良いかということである。意識というからには音楽や絵画を創作し、人を愛する気持ちでその発生源は脳内物質であるが、言わばその脳内物質は意識に物質的に転化しているのではないかと考えられるのである。意識の発生源は脳内物質であるが、人間意識として発現する場合、そこに物質の意識への転化過程・転化形態が存在すると考えられるのである。このようにして、物質と意識との相互関係を新たに考えていく必要があるのである。

意識ということの具体例は愛情である。愛情は意識の外にある外的な存在である女性の存在が第一。第二はその女性の生き方から刺激を受け、脳内に言わば愛情物質が生産され、愛の意識が芽生える。では次にこの愛情は完全に物質であると言い切れるだろうか？ たとえばラブレターを書くという行為は、愛という意識の具体的なあらわれであり、これは物質であるとは言えない。では何なのか？ 言えるのは意識のはたらきの結果がラブレターを書くという行為になることである。そうすると意識というものは、愛情物質の現実転化形態ではないだろうか？

ここに物質と意識との関係を解くカギがあると思われるのである。脳内で産出された愛情物質が、具体的な外的な人間行動となって発現する場合、それは意識と呼ばれる現実的に外化した形態に転化するものと考えられる。すなわち愛情物質の産出に至る外界刺激にたいして、具体的に人間の側としてはたらきかけていく際に、愛情物質が外的現実意識に転化すると考えられるのである。

意識は物質的に脳神経細胞内で生産された物質的なものであるが、しかしそれは機械的に扱える物質とは性質が違っているのである。つまり、意識となってあらわれる物質は、極めて多様で重層的なものと考えられるのである。すなわち物質的に脳内で生産された意識は、物質としての基本的な性質を有しつつも、現実生活の場で意識として現れる場合には、現実転化形態として、物質が現実的に変化した形態として、すなわち意識として発現していると考えられるのである。つまりそれほど物質の性質は多様であり、変化に富み、多重的・多層的なものであることがわかるのである。物質の現実的転化形態が意識であり、また物質的に生産された意識は、また言語という形を取って外的に発現すると考えられるのである。

## 2 心身と心脳問題

物質と意識との問題を考える際に、次に浮上するのが心身問題である。つまり身体と心、または精神との関係である。そして身体と精神との関係について唯物論は明確に身体一元論の立場であり、身体のはたらきから精神のはたらきを説明するのである。つまり身体の中の一部分である脳のはたらきと理解し、身体はもちろん感覚器官やその他の身体機能のはたらきを含むものとして理解するのである。つまり精神のはたらきは、身体の特に関心する部分のはたらきであるとする。しかしながら身体の物質的なはたらきとは明確に区別できるところの精神的・意識的なはたらきであるとするのである。

次に心脳問題については、唯物論は明確に心のはたらきを脳のはたらきとするが、脳自身の物質的なはたらきと、脳が生み出す心のはたらきを明確に区別するのである。なぜなら、心のはたらきは明確に、物質とは異なるものだからなのである。そして、種村完司氏はこの心身と心脳問題について次のように言う。「心身問題を心脳問題へと収斂させるなら、脳には帰す

ることのできない身体独特の機能を切り捨てることになる。たとえば、大脳と結合はしているが、身体全体に存在して対象認識や身体保全に固有の役割をしている視・聴・触などの感覚機能、内臓・骨・筋肉・血液などに作用し、成長や代謝を（そして脳の発育をも）つかさどる下垂体・甲状腺・副腎等の内分泌機能、体内に入りこんだ異物に反応して抗体をつくり生体を制御しようとするリンパ球（T細胞とB細胞）の免疫機能等がその代表であろう<sup>(1)</sup>として、心脳問題において身体諸機能のはたらきの重要性を強調する。しかしながらこの種村完司氏の理論には陥穽がある。つまり第一には、心のはたらきの源泉である脳のはたらきを他の身体諸機能のはたらきと同列化してしまい、脳のはたらきの重要性を相対化してしまっていることである。

第二に、身体と精神との関連を考える際に、身体が言わば外界事物存在からの刺激を受容する感覚器官等に代表される理由は、いつに外界事物存在そのものを看過してはならないということなのである。外界事物存在からの刺激が身体各部によって受容されることにより、脳にその刺激が信号化されて伝達され、脳が新たな行動を起こす指令を発して、ふたたび外界事物存在に身体がはたらきかけていくという観点を闕如させてはならないのである。

種村完司氏のように過度に身体機能を強調することによって生ずる弊害は以下のとおりである。つまり第一に、人間の意識を生み出す源泉である外界事物存在を過小評価すること。第二に、意識のはたらきを作り出す脳神経細胞のはたらきを身体機能活動に収斂してしまうことにより、脳神経細胞のはたらきを過小評価してしまうこと。第三に、身体機能の一部である人間の感覚器官のはたらきの位置づけが不明確になることによって、外界刺激が人間の感覚器官を通して脳神経細胞に伝達され、脳神経細胞によってその外界刺激信号が言わば消化吸收されることを過小評価してしまう危険があるのである。その恐れは種村完司氏の次の表現でも明らかである。「身体は、自らの表面およびさまざまな部位に、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚等の感覚器官をそなえ、自己内部の中樞神経系によるそれらの分化と統合、受容と統御をもって、対象に立ち向かっている。身体は、自己内外の諸器官・諸組織の有機的統一体として、活動目的にふさわしい、対象に関する正確で有意義な知識を獲得するために機能する。だとすれば、認識主体としては、意識よりも身体にこそ、われわれはその資格を与えるべきであろう<sup>(2)</sup>」と。ここでは種村完司氏はみずからの身体論に拘る余り、というよりもその身体理論の当然の帰結として、人間認識主体を意識に求めるのではなく、間違っ「て」身体に求めてしまっているのである。人間意識が外界を認識するのではなく、人間身体が外界を認識するのだと。

これは明確に、唯物論の深化ではなく、唯物論をもう少しで間違った方向に導こうとする危険が存在するのである。理由は次のとおりである。すなわち、身体機能に拘泥する余り、意識のはたらきをも、身体機能に埋没させてしまうことにより、唯物論が課題とする物質と意識との問題を曖昧にするのである。唯物論が踏まえる物質と意識との関係問題において、種村完司氏は身体機能を強調する余り、われわれが外界世界を感知することにより、頭脳のはたらきによって産出させる意識のはたらきをも過小評価してしまうことになるのである。これは逆の意味で観念論の立場に接近していくおそれがあるのである。唯物論はあくまでも物質と意識との関係を基礎に据え、人間が現実に行動し得るのはいつに意識のはたらきであり、その意識のはたらきは物質とは明確に区分されるものであることを主張するからなのである。

意識と身体とを混同してしまう種村完司氏はさらにこのことについて自縄自縛に陥る。すな

わち認識する主体としての意識にたいして追い討ちを掛けて、認識する主体は「意識である身体」としてしまふのである。明らかに意識と身体との混同である。人間の意識と人間の身体とのはたらきとは、明らかに区別して考えなければならないものなのである。それを混同してしまい、人間の行動の源泉主体は「意識である身体」というように曖昧なものにしてしまふのである。意識と身体との関係については、幾度も言うように人間は外界刺激を身体機能の一部である感覚器官を使って感知し、その感知した外界信号を脳髄が読み取り、消化吸收して、意識を産出させているのである。このプロセスを混同してはならないのである。このプロセスを混同した場合、種村完司氏のように「意識である身体」といった良く理解できない概念になってしまうのである。種村完司氏はこの混同を次のように表現する。「認識する主体としての身体という場合、そこには明確な認識意図、能動的な認識姿勢が顕著なのであり、主体という名にふさわしい身体は、意識性の高い身体であり、いわば意識として働いている（あるいは働こうとしている）身体である。自動的活動に身をまかせている身体ではなく、ややレトリカルに言えば、認識すべき対象を前にして『意識に変貌している身体』『意識である身体』<sup>(3)</sup> となってしまうのである。人間がものごとを認識できることの持つ意味の第一は、人間が外界世界刺激を把握できるということ。第二に、その外界刺激をもとに意識を発生させるということ。第三にその発生した意識は、認識を形成して、具体的な行動を人間にとらせるということであるにもかかわらずである。この観点を混同してしまうと種村完司氏の言うように「意識に変貌している身体」「意識である身体」となってしまう、意識と身体、すなわち意識と物質との問題に明確な解答を導き出すことができないままになってしまうのである。

物質と意識との関係について、自縄自縛の解決不能に陥った種村完司氏は、ではこの矛盾をいかに克服しようと試みるのであろうか。その解決のために種村完司氏は、唯物論の立場から明確に物質が第一義的なもので、意識は物質から発生する第二義的なものであると言わないで、物質と意識との「交流」「相互作用」といった曖昧な立場に立ち入る手法を採ることになるのである。つまり種村完司氏は、そのことにより物質の第一義性と意識の第二義性を曖昧にしてしまう立場に立つのである。「部分知覚（＝感覚）であれ全体知覚であれ、それらは知覚する主体と知覚される対象との、交流ないし相互作用の産物である。交流、相互作用という言葉を使うのは、外から刺激が到来しそれを感官が受容するという一方的な作用の結果として、知覚を理解しないためである」<sup>(4)</sup> となってしまうのである。この誤りの根源は、物質存在の第一義性とそれから発生する第二義的な意識のはたらきを理解できない点にあるのである。この観点を曖昧にするところ種村完司氏のような感覚中心の知覚主義に陥り、物質と意識との関係を曖昧にし、身体機能の一部である感覚器官の知覚作用を過大評価してしまうのである。感覚器官はまさに身体の一部であることによって、外界刺激を脳髄に伝達できるのである。すなわち感覚器官もまた発生学的には脳神経機構の一部なのであり、外界刺激を脳神経細胞に伝達するための役割機構なのである。しかしながら、そのことにもかかわらず、外界事物存在である物質存在は不変であるということなのである。

この物質と意識との関係における身体機能の過度の強調の裏返しは、身体機能のはたらきを信ずる余りに自己の心身の体験を強調してしまうことなのである。すなわち種村完司氏の理論は明らかに身体機能を重んずる余り、その身体を保有するみずからの身体的体験や精神的直観を過度に強調してしまうのである。そのことについて種村完司氏の主張を見てみよう。種村氏

は意識や身体に関する常識と科学的知見は無益ではないと言いながら「しかし『体験的・直観的把握』が、それ以上に威力を発揮するのではあるまいか。自分だけにしか現出しない、自分だけが所有しうる心身の体験。自分には生きいきとしてごく自明だが、しかし言語化するのにはひじょうに難しい心身の直観。この種の『体験的・直観的』な心身のあり方も、やはり認められてよいと思われる。これこそ、メルロ＝ポンティをはじめとする現象学者たちが『生きられた身体』と呼んで、人々にくり返し注意をうながしてきた代物であろう」。<sup>(5)</sup> ここにあるのは自分の体験。自分の直観なのである。自分だけに固有の心身体験。自分だけに固有の心身直観なのである。もちろん人間は自分の体験や直観によって、意識を形成する。ただし哲学の課題は、幾度も言うようにそのみずからの体験や直観の重要性を、物質と意識という範疇のなかで正確に位置づけることなのである。すなわちみずからの体験のもととなる外界事物存在とその変化。またみずからの直観のもととなり外界事物存在とその変化を看過してはならないということなのである。外界事物存在を看過した場合に、過度に自己の体験や直観を強調してしまい、その自己の体験のそとにあり、自己の体験のもととなる外界事物存在のことを忘れ去ってしまってはならないのである。人間は自己の体験を通して、意識を形成する。そのことは正しい。だが忘れてはならないのは、自己の体験のそとにあって、体験の原因となる外界世界と人間社会の動きのことを忘れ去ってはならないということなのである。

### 3 一次性質と二次性質

種村完司氏のように、外界事物存在のことよりもみずからの感覚器官のはたらきを強調する知覚主義の立場の源泉は、ジョン・ロックである。ロックはわれわれの観念の源泉を感覚器官に求め、それを感覚と呼ぶのである。つまりロックは観念論の立場から観念の源泉を唯物論のように外界事物存在に求めるのではなく、感覚器官のはたらきに求めてしまっているのである。感覚器官のはたらきについて言えば、それはあくまでも観念の源泉ではなくて、外界事物存在からの刺激を信号化する器官なのである。この点を把握しないところではロックのように、はたまた種村完司氏のように、感覚器官のはたらき（もしくは種村氏に拠れば身体）を観念の源泉と見做してしまう誤り理論が発生するのである。ロックはその著『人間知性論』で言う。「私たちの感官は個々の可感的物にかかわって、それら事物が感官を感触するさまざまな仕方に応じて物ごとのいろいろ別個な知覚を心へ伝える。こうして、私たちは黄や白や熱いや冷たいや柔らかいや堅いや苦いや甘いや、すべて可感的性質と呼ばれるものについて私たちの持つ観念を得る。私たちの持つ観念の大部分のこの大きな源泉はまったく感官に依存し、感官によって知性へもたらされるので、私はこの源泉を感覚と呼ぶ」<sup>(6)</sup>と。

もう明瞭である。ロックは人間の観念の源泉を感覚器官のはたらきに求めるのである。そしてそのことによって外界事物存在を消去しようとするのである。人間の感覚器官のはたらきについて言えば、感覚器官は身体機能の一部であり、その役割は人間のそとにあり、人間の感覚器官のはたらきとは無関係に存在する外界事物からの各種刺激を視覚・聴覚・触覚等で読み取り、つまり人間の感覚もまた第一義的な外界刺激に拠る第二義的なものであるということであり、その読み取った信号を脳髓が消化吸收して、意識を産出するという仕組みのなかにあるのである。つまり人間の感覚もまた外界事物存在の反映なのである。暑さ、寒さという感覚が生

ずるのはあくまでも外界環境の反映なのである。従って、ロックや種村完司氏の知覚主義を唯物論的に押し進めることが大事なのである。つまり人間感覚器官のはたらきの先にある、また人間感覚器官によって捕捉できる場所の外界事物存在に辿り着くことが大事なのであり、また知覚主義を押し進めていけば、必ず唯物論的に外界事物存在に辿り着くことができるものなのである。

ロックは物質を一次性質と二次性質とに区分するのである。ロックによれば物質の一次性質とは、物質の形、大きさ、固体性、数、運動や静止などであり、二次性質は色、香、音、味であるという。このように物質を客観的な一次性質と主観的な二次性質とに初めから区分してしまふところに客観的なものと主観的なものとの混同が発生しているのである。物質について言えば、それは幾度も言うようにそれは客観的な事物存在であり、形、大きさ、運動・静止等は物質がそのような形状で存在し、運動と静止のなかに存在しているという事実を示しているだけなのである。そしてロックの言う二次性質である物質の色、香りも主観的に捉えられるから色や香りが発生するのではなく、もともと物質の性状として実在しているだけなのである。そして重要なことは、人間の感覚器官もまた物質の性質の反映を受けてはたらきを示して、それは白い物体であるとか、それは赤い物体であるとかの感覚を生じさせているのである。つまりあくまでも白い色をした物体存在が基礎であり、人間は感覚器官がその物体の白い色を白いと反映し、その白いと認識した反映記号を感覚信号として脳神経細胞に伝達しているというプロセスなのである。つまり感覚もまた外界環境の反映であり、模写であるということが言えるのである。

このように考えてくるとロックが何故、物質を二つの性質に区分し、一つは客観的な一次性質であり、もう一つは主観的な二次性質であるとした意味が分かるのである。つまり区分する必要のない一次性質と二次性質とに物質を区分したということは、明らかに客観的な物質存在にたいして、主観的な特にみずからの感覚器官のはたらきの重要性を強調したいがためである。さらに言えば、主観的観念論者の大きな特徴として、客観的な物質存在になんとかして主観的な感覚器官のはたらきを持ち込み、客観的な事物存在を主観の側に引き寄せることによって、ものごとを主観的に考察せんがためなのである。

ロックに代表される主観的観念論の立場のもう一つの大きな特徴は、自分の経験を観念の基礎とすることなのであり、そのことによりバークレー伝来のイギリス経験論の流れを看取することができるのである。ロックは言う。「どこから心は理知的推理と知識のすべての材料をわがものにするか。これに対して、私は一語で経験からと答える。この経験に私たちのいっさいの知識は根底を持ち、この経験からいっさいの知識は由来する」<sup>(7)</sup>と。観念や知識の基礎に経験を据えることについて言えば、第一にわれわれの観念や知識の発生源を外界世界である経験に求める点においては半分正しいが、あとの半分の誤りは、観念や知識の源泉がいつにわれわれの経験を含む外界事物世界であり、観念や知識は外的事物世界・人間世界の反映であり、第二義的なものであり、第一義的なものはあくまでも外的事物世界・人間世界であることを看過している点にあるのである。確かにロックを含むイギリス経験論の流れは、観念の基礎としてわれわれの経験を措定した点は特筆されるべきものなのである。だがしかし、その範囲に留まってしまってはならないのである。われわれの観念の発生源は経験を含む外的世界の動きにあり、それらの外的世界の動きが第一義的なものであり、われわれの観念はその外的世界の動き

の反映である第二義的なものであるということを理解しなければならないのである。しかも、われわれの眼や耳といった感覚器官のはたらきもまた外的世界の動きに拠る第二義的なものであることをも。

感覚器官のはたらきもまた人間世界を含む外的世界の反映であり、感覚器官はその外的世界の動きを脳髄に伝える役割を果たしているということを徹底させることのできないロックは、当然の帰結として観念は感覚と同じものだとしてしまうのである。「いつ人間は観念を持ち始めるかと尋ねられるとしたら、初めて感覚するときというのが真の答えだと、私は思う。なぜなら、感官が観念を伝え入れないうちは心に観念はないように見えるから、知性にある観念は感覚と同時だと私は想うのである」<sup>(6)</sup>と。すなわち人間が感覚しなければ、観念は発生し得ないとするのである。このロックの考えは次の意味で誤っているのである。すなわち感覚器官のそとにあり感覚器官に刺激を与え、観念を発生させる外的事物世界の存在のことを消去してしまっている点である。すなわち、外界環境はわれわれの感覚器官のはたらきとは無関係に存在しており、しかも観念の発生源は外的世界にあることは確かなのである。

#### 4 感覚と観念

人間の感覚と観念との関係について、ではどう考えれば良いのであろうか。唯物論の立場からは、人間の感覚もまた人間の観念も外界事物の反映と理解するのである。まず感覚器官についてである。感覚器官を見てみるに、これは明らかに外界刺激を受容するための器官として発生しているのである。すなわち暑いとか寒いとかの外界変化を受容するために、感覚器官が身体器官の一部として発達したのである。感覚器官が暑さとか寒さとかを感じないとすれば、人間の生存自体が危うくなるからなのである。このように考えれば、感覚器官の発達は、自然界のなかで生きる人間が必然的に発達させた器官であり、その器官は外界刺激を受容するために発達したものであることが分かるのである。つまり感覚器官のはたらきは、外界刺激を受容するための第二義的な役割を果たすのであり、第一義的なものはあくまでも変化して止まぬ外界存在なのである。

次に人間の観念についてである。観念もまた感覚器官のはたらきと同じく、外界刺激に拠り形成されるものなのである。観念の発生源には必ず、外的人間世界の動きと自然界の動きとがあるのである。われわれ人間は社会的動物として、また思考することを本性とする動物として、あくまでも外界刺激に依拠して観念のもとを得ているのである。その証拠にたとえば人間関係から発奮を受けたり、美しい自然から啓示を受けて素晴らしい音楽や絵画を産出しているのである。外的人間関係や美しい自然界存在がないところでは、人間らしい感情や、芸術的精華は生み出されないのである。このように考えると、人間の観念もまた第一義的存在である自然界または人間社会からの刺激を受け取って発生する第二義的なものであることが分かるのである。すなわち人間の観念は外的世界を反映する第二義的なものであり、不変であり変わらないものである第一義的存在は外的自然界存在と人間社会なのである。

この唯物論の観点にたいしてロックは、主観的観念論の立場から人間感覚のはたらきを尊重する余り、その感覚器官にはたらきかける源泉である外的事物存在を結果的には消去することになっているのである。観念の源泉である自然界存在は、人間の個別感覚器官の存在とそのは



たらきにかかわらず存在しているという観点が重要なのである。個別の人間の感覚器官のはたらきよりも先に、外的事物世界存在が存在しているのであり、人間の感覚器官はその後で、その影響を受けて作用しているのである。すなわち人類の最初のころにあっては、感覚器官のはたらきは鈍かった。まさに本能的に生きているだけだった。しかしながら生活の進行は、人間の感覚器官のはたらきを鋭くしなければ生存できなかったのである。つまり眼はより遠くを視認できるようになり、耳はより多くの音域を聞き分けるように、嗅覚はより多くの種類を嗅ぎ分けられるように発達していかざるを得なかったのである。その発達過程により人間は感覚器官のはたらきによって、より外界事物存在を反映していく能力を身に付けていったのである。またそのことにより、人間はよりの確に外的世界の動きを知ることができ、よりの確な行動を提起できるようになっていったのである。

イギリス経験論にあってロックと同じく主観的観念論の立場に立つのが、デビッド・ヒュームである。ヒュームはその著『人性論』で感覚主義・経験主義を繰り返す。「実体の観念も様相の観念も、想像により結びつけられた単純観念の集合に他ならない。この集められた単純観念に特定の名前をつけて、われわれ自身あるいは他人にその集合を思い起こさせるようにしているのである」<sup>(9)</sup>と。すなわちヒュームはものごとの実体や様相についてのわれわれの観念は、想像により集められた単純観念の寄せ集めであり、それに一定の名辞を付加したものに他ならないとするのである。これは明らかにバークレーの焼き直しである。つまりヒュームにあっては実体、すなわち物質は観念の集合、観念の束だとなってしまうのである。これはロックの経験主義の立場からもさらに大きく後退するものである。なぜならロックにあっては人間の感覚器官のはたらきを徹底し、みずからの経験を追及するならば必ず、実体である外的事物存在に行き着くという展望を持つ理論だったからなのである。みずからの経験は、必ず経験のもととなるこの人間社会存在や自然界存在という外的世界に行き着くのである。火を見て熱いと経験するのは、必ず火という事物存在の運動があるからなのである。しかもロックはその火を熱いと感ずるたとえば触覚という感覚器官のはたらきが観念だとしてしまう誤りを犯しはしたが、人間の感覚器官のはたらきが外的事物世界との間にあることを証明して見せた点に功績があるのである。すなわちみずからの経験のもとを推し進め、またみずからの感覚器官のはたらきを推し進めれば、必ず二次的・二義的反映結果である感覚のもととなり、感覚器官にはたらきかけるもととなる外的事物存在に行き着くからなのである。

## 5 原因と結果

しかしながらヒュームにあっては、ロックよりもさらに一步後退し、バークレー直伝の主観的観念論に陥ると同時に、さらに悪いことに不可知論に迷い込んでいる。すなわち実体の本質、つまり事物存在の本質をわれわれは知ることができないとして、みずから現実存在から逃避してしまっているのである。すなわちヒュームは「実体を形作る諸性質は、普通は、なにか知られないあるものに属するとされ、これに内属すると想定されている」<sup>(10)</sup>として、実体である物質存在は不可知であるとする。実体を不可知としてしまったので、そのあとの必然の帰結として、実体から観念を導き出すのではなくて、ものごとの諸聯関を原因と結果という単なる因果関係に押し込めようとしてしまうのである。「一般に認められているように、心の能力は限

られており、無限をあまさず、適正に思いだくことは決してできない。かりにこのことが認められていないとしても、観察と経験とが極めて明瞭に示していることからみて、それは十分に明らかであろう」<sup>(1)</sup>とヒュームは不可知論を展開するのである。

ヒュームの語るような不可知論は、物質と意識との問題について二重の意味で誤りを犯すことになるのである。それは第一に、人間の観念発生のもとになる物質存在は知ることができないとして、観念の発生源である物質存在を消去してしまうことにより、物質と意識と言うときの物質の問題を最初からネグレクトしてしまうのである。第二に不可知論に陥ることにより、人間の認識能力の無限性をみずから否定してしまい、認識能力が少しずつ拡大・深化していく過程を見ようとしないのである。人間の認識能力はもっぱら物理的能力の制限性により、外界世界の動きすべてを認識することはできない。しかしながら、物理的に制限を受けながらも人間の認識能力は物質世界の絶対性と、その絶対性に人間が相対的な認識能力を駆使しながら接近していけることを知っているだけなのである。人間にとって未知なる物質世界のことは知ることができないという不可知ではなく、外界世界すべてを知ることはできないが、しかし人間は物質存在の絶対性は知ることができ、しかも制限ある認識能力を使って、人間は人間の感覚器官のはたらきを使って、その物質存在の一部に接近していけるのである。人間の認識は絶対的な事物存在の解明には一挙には到達はできないが、その未知なるものに人間の能力を駆使して接近していけることを知っているだけなのである。

物自体は不可知であり、知る必要のないものであり、われわれはみずからの経験の範囲を超えてはならないとするヒュームの不可知論は、必然的に物自体を否定することにより、物質の運動諸関係を原因と結果という因果関係の狭い枠組みに押し込めようとするのである。ヒュームの持ち出す原因と結果とについて言えば、それは物質の運動を原因として、その現象を結果とするものであり、単なる物質の運動の一面を言い表しているに過ぎないのである。原因と結果の観点を強調することは、ものごとの現象面に眼を奪われ、現象もまた物質の本性である物質の運動形態であることを消去してしまっているのである。しかもヒュームの言うようにものごとの諸関係を原因と結果に押し込めてしまうことにより、哲学が課題とすべき物質と意識との問題においても解き明かすことができないようにみずからしてしまっているのである。

もし原因とその結果である現象との関係について言うのであれば、物自体と現象との関係を言わなければならないことなのである。そして物自体とはヒュームの言うように、知る必要のないことでもなく、またカントの言うように知ることができない「不可認識的なもの」と定義づけられるものではなくて、われわれの眼前に存在し、明らかに見ることができ、触ることができる事物存在のことを言うのである。そして現象とは、その物自体が現実には現れ出でたものであることも明白なのである。ところで物自体とは、われわれの眼前に存在はしているが、われわれは物自体のすべてを知ることはできないのである。その理由は二つある。一つは、われわれの生理的認識能力に限界があるから、外的事物世界のことすべてを知ることはできないのである。第二に、物自体の存在は絶対的ではあり全面的ではあるが、われわれが眼前に知ることのできる範囲と言うのは限られているからなのである。宇宙の彼方のすべてのことを知ることができないのである。ただし、われわれの認識能力には限界性はあるがしかし、われわれは物自体の存在が絶対のものであり、それが現象となって現実に現れ出でていることを知っているだけなのである。

そしてまたヒュームの言うように、このような物自体と現象との関係を単なる原因と結果という狭い範疇に押し込めてはならないのである。大雨という原因があつて、洪水という結果が生ずるのは確かに原因と結果との関係である。ただしわれわれはもっと深く、掘り下げてこのことを考察すべきなのである。大雨も洪水もわれわれの現前にある自然界の動き、運行なのであり、われわれはその自然界運行の絶対性、現実性をまず説明しなければならないことなのである。そしてわれわれが、明らかにするのは、その事物存在である物質と人間意識との関係について述べるものなのである。そしてその物質と意識との関係については前述したとおりなのである。

## 6 マッハの物質否定

物体を眼で見えるときの色や、耳で聞こえるときの音であるとして感覚第一主義を徹底したのはエルンスト・マッハである。マッハのように物体を感覚複合体としてしまい、みずからの感覚のはたらきでとらえられた色や、音が物体だとする立場はバークレー伝来の主観的観念論の立場を徹底したものである。このマッハの倒立は「色、音、熱、圧、空間、時間等々は多岐多様な仕方では結合しあっており、さまざまな気分や感情や意志がそれぞれに結びついている」<sup>(12)</sup>として、物質的な色や音等をみずからの気分や感情に結びつけてしまうことになる。「この綾織物から、相対的に固定的・恒常的なものが立現れてきて、記憶に刻まれ、言語で表現される。相対的に恒常的なものとして、先ずは、空間的・時間的・空間的に結合した色、音、圧、等々の複合体が現れる。これらの複合体は比較的恒常的なためそれぞれ特別な名称を得る。そして物体と呼ばれる」<sup>(13)</sup>として、マッハは明確に物体は色や音という、あとで見ることになる要素複合体であるとするのである。

すなわちマッハは物理学者であるにもかかわらず、物質を人間の感覚器官がとらえた範囲での色や音であるとして、物質の実在性をみずからの感覚器官のはたらきに解消してしまうことにより物質存在を否定し去っているのである。「ローソクの炎の赤さを見、熱さを感じるのは〈私〉〈自我〉」<sup>(14)</sup>なのである。このことはバークレー、ロック、ヒュームと流れている主観的観念論をさらに徹底させたものである。マッハにおいては、バークレー、ロック、ヒュームが区別した物質と意識との問題解決において、その区別をすることなく、単純さのゆえに物質と意識とを混同してしまい、物質を感覚器官のはたらきに解消してしまうことにより、自然界・物質存在を否定し去っているのである。それは主観的観念論の究極の極みと言ってしまえば、それまでなのであるが……。

物質のはたらきをすべて自分の感覚、自分の自我に還元することを好むマッハの手法を見てみよう。「尖端Sをもった物体が目の前にあるとしよう。Sに触れ、それをわれわれの身体と関聯づけると刺痛を感じる。刺痛を感じることなしにSを見ることはできる。が、刺痛を感じずるや否やわれわれは皮膚にSを見出す。という次第で、可視的な尖端が持続的な核であり、これに事情如何によって、偶然的にいわば刺痛が附着している。この種の事態に頻々と出会っているうちに、人々はついに物体のあらゆる性質を持続的な核から出て身体を介して自我にもたらされた結果——この結果が感覚と呼ばれているのであるが——だと見做すようになる。が、このことによって核の方は感性的内容を全く失ってしまい、単なる思想上の記号になる。とす

れば、世界はわれわれの感覚だけから成り立っているというのが正しいことになる」<sup>(15)</sup>として、痛いと感じるわれわれの感覚器官のはたらきがあつてはじめて物体は存在し得るとし、あまつさえ、その物体は単なる思想上の記号となるとしてしまうのである。物体を感覚器官のはたらきに還元してしまうマッハの立場は、いつに物体の実在性をみずからの感覚器官のはたらきのうちに解消してしまい、物体の実在性を否定してしまうマッハの理論からの当然の帰結なのである。パークレー伝来の主観的観念論の徹底化が誤ってなされるとこのように物質否定の自我の感覚主義となってしまうのである。逆なのである。人間の感覚器官のはたらきを逆の方向にもって行つてはならない悪見本なのである。感覚器官の正しいはたらきの方向とは、感覚器官によって把握でき、また人間の感覚器官に刺激を与える外的事物世界の存在の方向に行かなければならないのである。すなわちマッハにあつては物質から感覚へという唯物論ではもちろんないと同時に、感覚から物質へという観念論の立場でもないのである。この両者の対立を超えたとして、感覚の先に何も見ていないで、マッハが感覚の先に見ているものは、単なる思想上の作りごとである記号があるだけなのである。

マッハの感覚主義はとどまるところを知らない。「白い球が鐘にあたる。音がする。この球はナトリウムランプの前では黄色く、リチウムランプの前では赤い。ここでは諸要素（ABC……）は相互に関連しあっているだけであつて、われわれの身体（KLM……）からは独立であるように見える。しかしわれわれがサントニンを服用すると、球はこの場合にも黄色になる。一方の眼を指で側方に押しやると二つの球が見える。眼を閉じてしまうと、球は現前しない。聴神経を切断すると、音がしない。それ故、要素ABC……は相互に関連し合っているだけでなく、要素KLM……とも関連しているのである。この限りにおいてのみ、われわれはABC……を感覚と呼び、ABCを自我に属するものとして考察する」<sup>(16)</sup>と。要素というワードを持ち出してはいるが、根本は感覚によって捕捉された物質を要素（感覚要素）に矮小化してしまい、物質存在の実在性をマッハが消し去ろうとしていることは明らかである。さらにマッハは「私が『要素』『要素複合体』という表現と併用して、ないしは、それを代用して『感覚』『感覚複合体』という言葉を用いる場合、要素は結合と関聯においてのみ、すなわち、函数的依属関係においてのみ、感覚なのだということを銘記さるべきである。この感覚は、他の函数的関聯においては、同時に、物理学的客体である」<sup>(17)</sup>として、いよいよ、感覚要素が函数的関聯であり、物質はその函数的関聯において把握されるとして、物質でもなく意識でもなくて、その対立を超えたものとして、函数的関聯というワードの登場である。物体は感覚でとらえられる諸要素（ABC）であり、しかもその諸要素は函数的依属関係にあるとするのである。

このマッハの理論は二重の意味で誤りを犯している。第一は、物質と意識との関係をネグレクトして、みずからの感覚に依拠する諸要素の函数的依属関係に現実逃避していること。第二に、物質と意識との対立関係を函数的関聯が超えたとしながら、実は、主観的感覚主義にこっそりと滑り込んでいるからなのである。しかもマッハは悪いことに、物質がみずからの感覚諸要素複合体であるとすることによって、われわれの感覚のそとにあつて、感覚器官のはたらきとは無関係に存在している自然界物質存在を見事に消し去ってしまっていることなのである。「物体と感覚、外界と内界、物質界と精神界との間の溝渠は、このような次第であるから、実は存在しない」<sup>(18)</sup>として、物質も意識も超えたとしながら、実は実在するその両者を否定し

さることにより、物質と意識との関係理解を放棄してしまっているのである。

バークレーの「存在即知覚」論が、マッハにあってはさらに徹底され、もしくは本質を覆い隠すために「存在即知覚」論に加えて、物質は函数的依属関係にあるとするのである。このマッハの議論の本質は、われわれの現前にそのままの形で実在している物質存在を函数概念という観念的なものを充て嵌めることにより、物質存在の現実性を否定し、延いては物質存在そのものを消去し去ってしまうことにあるのである。哲学が解き明かすべき課題である物質と意識との関係において、マッハはその問題解決を放棄し、物質はみずからの感覚要素であり、しかもそれは函数的依属関係にあるとして、最初から物質の実在性を観念の側に組み込んでしまうことにより、物質の実在性を消し去ってしまっているのである。このようなマッハの立場は、みずからの感覚と経験とのはたらきを強調して、唯物論の一步手前まで行き着いたたとえばロックの観念論よりもさらに後退して、感覚器官のはたらきから出発しながら、函数概念を持ち出すことによってさらに奥深く主観的観念論の側に逃避してしまっているのである。

マッハの順序はこうである。赤いローソクの炎を見る自分の視覚のはたらきがあるからこそ、ローソクの炎は赤いと。そしてローソクの炎を赤いと感じなければローソク自体は存在しないのであると。逆に言えば、ローソクと言う物体は赤いという色なのであると。そしてその赤いという色は、みずからの視覚が赤いと捉えたことにより、感覚の要素であると。すなわちたとえばローソクという物体は赤いという色という要素であると。そしてその赤い色や、青い色という感覚要素は相互に結合等の函数的依属関係にあるとマッハはするのである。かつてのバークレーは「存在即知覚」だった。バークレーは単純に物体存在とはみずからの知覚であり、その知覚なしであれば物質は存在しないとする範囲の主観的観念論ではあった。しかしながらマッハにあっては、バークレーの観点をさらに推し進めて、物質は感覚要素であり、感覚要素は函数的依属関係にあるとして、あたかも物質と意識との対立を函数概念で超越したかのように主張する。しかしながらそのマッハの立場は、明確な主観的観念論の立場であったバークレーよりもさらに後退しているのである。なぜなら、物質と意識との関係の説明において、バークレーは明確に主観的観念論の立場から「存在即知覚」を主張した。しかしながらマッハにあっては、物質と意識との対立を超越する函数概念と言いながら、物質と意識との対立を解消すると言いながら、実は巧妙に物質の実在性を否定し、函数概念と言う観念的概念を導入することによって、物質と意識との関係を捨象してしまって、より物質と意識との関係を曖昧にしてしまっているのである。バークレーは、バークレーの立場で主観的観念論の「存在即知覚」の立場は明確であった。のちになってマッハは、物質と意識との関係を説明するに、物質存在をいかに巧妙に消去し、こっそりと主観的観念論の側に滑り込むかのために、あたかも中立的な函数概念を持ち出したに過ぎないのである。

物質と意識との関係を説明するのに、マッハはあたかも両者の対立を超越したかのように函数概念を持ち出してはいるが、実はその函数概念は物質存在のリアリティを巧妙に覆い隠すもの以外のなにものでもないのである。物質の動きが函数概念化され得るのは、いつに物質の動きそのものが、物理的・計数的に正確な動きを成しているからに過ぎないのである。物質の本性が正確に計量化され得るに過ぎないのである。この事実を眼を瞑って、物質諸関係は函数概念のもとにあり、従って物質と意識との関係はすべて函数概念で説明できるとするのは、みずからの主観的観念論の立場を別の言葉で表現していることを明らかにしているのである。

## 7 物自体と現象

カントは物自体と現象との関係について次のように述べる。「感官が我々に認識させるのは、決して物自体でもなければ、また物自体のひとかけらでもなくて、物自体の現れであるところの現象にほかならない」<sup>(19)</sup>とするのである。カントにあって特徴的なのは、物自体の存在は認めているのであるが、その物自体は不可知なのであり、われわれは感官のはたらきによって、物自体の現れである現象を知るとするのである。このように物自体について不可知であり、われわれは現象を知るだけであるとするカントの立場は、次のようにまとめることができる。

第一に、物自体を不可知とすることによって、せつかく物自体の現れである現象にわれわれがわれわれの感覚器官のはたらきを使って接近していきけるのを阻んでしまっているのである。すなわち現象のもととなる物自体を理解しながら、それは不可知であるとして、感覚器官のはたらきは現象面に留まれば良いとして、物自体への考察を押し留めてしまっているのである。これは、バークレーやロックのような主観的観念論からの一歩前進ではあるが、物自体の存在を予想しながら、物自体は知る必要がないとしてみずから二歩後退してしまっているのである。現象に現れ出るとには自然界存在という物自体があり、それは決して不可知ではなくて、われわれがみずからの感覚器官のはたらきを使って、物自体の現れである現象を知ることができることなのである。

第二に物自体を不可知とすることによって、カントは物質と意識という問題にたいしての答えを明確に提起し得ないのである。さらに言うならば、物自体である外的自然界存在から人間は意識の源泉、感覚の源泉を受け取っているということを明確にし得ないでいるのである。われわれは外的世界から刺激を受け、その刺激を感覚器官が受け取り、現象面に現れ出ていることの物質的根源を考察しているということ。

カントは言う。「物自体がなんであるかということについては、我々は何も知らない、我々はただ物自体の現れであるところの現象がいかなるものであるかを知るに過ぎない、換言すれば、物が我々の感官を触発して我々のうちに生ぜしめる表象がなんであるかを知るだけである」<sup>(20)</sup>と。なぜカントは物自体の存在を認めながら、その物自体の前で立ちすくんでしまうのであろうか。理由は明確ではないが、想像するにおそらくカントにあっては、信仰の領域が大きく比重を占めていたのではないか。つまりカントの信仰の領域の問題にカントが直面した場合、信仰の対象は物自体という物質的なものではなくて、極めて精神的産物であったがためであると思われる。せつかく、物自体の措定という唯物論の入り口まで辿りつきながら、時代背景のこともあり、特に信仰の領域にカントが想いをいたすゆえにカントは二歩後退してしまったのである。レーニンが著作『哲学ノート』で言う。「カントにおいては認識は自然と人間とのあいだに仕切りをする。両者を隔離する。実際には認識は両者を結合するのである。カントにおいては事物に関する、ますます深くなっていくわれわれの知識の生きいきした *Gang*、*Bewegung* のかわりに、物自体という“空虚な抽象”がある」<sup>(21)</sup>のである。

ところでマッハは感性的知覚こそが、世界認識のかけがえのない基礎であるとする。「黒ずんだがっかりした幹、風にそよぐ無数の小枝、なめらかでつややかな葉、こういうものを具えた樹木が、不可分な全体として立現れます。同様に黄金色の甘い果物や熱い焰をあげて動いて

いる明るい火なども、単一体として考察されます。名辞は全体を表します。言葉はそれに結びついている記憶の連鎖を忘却の淵からひきずり出します。人間が最初に抱く印象や表象とはそういうものです。物というのは、いうなれば、極めてさまざまな感性的印象の共同作業から生じ、相対的な恒常性をもってはたらく一定の現象複合体です」<sup>(22)</sup>と。マッハにあっては、物とはさまざまな感性的印象の共同作業から生ずる一定の現象複合体であるとするのである。つまり、物質とはわれわれが見たり、聞いたりする感性的印象の集まりであり、その感性的印象の基礎にあるのはわれわれの知覚であるとするのである。これは幾度も言うようにバークレー伝来の「存在即知覚」論の繰り返しなのであり、さらにマッハにあっては、バークレーでさえ踏み込まなかった物自体についても、その存在を知覚作用によって否定するのである。物自体と現象との関係について言えば、物自体は現象の根源を成し、現象は物自体から生ずるのである。これがヒュームにあっては、物自体は知る必要がなく、われわれはみずからの経験の範囲で、ものごとの生起する原因と結果関係を解明すればこと足りるとする。一方、カントにあっては物自体の存在は認めるが、しかしそれを「不可認識的なもの」「現象から原理的に区別されたもの、原理的に別の領域、知識には到達できないで信仰にたいして啓示される彼岸の領域に属するもの」<sup>(23)</sup>となるのである。

物自体と現象との関係については次のようなことなのである。まず物とは、物質存在のことであり、その物質存在はマッハやバークレー等の説にもかかわらず、自分の意識や感覚からは独立して、外部に存在しているということなのである。無理に物質存在をわれわれの感覚や意識のはたらきと結びつける必要は何もないのである。出発点は物質存在はあくまでも、われわれの意識や感覚のはたらきとは別個に独立に存在しているということなのである。われわれの意識や意思とは無関係に自然界運行があり、自然界そのものはわれわれの意識や意思とは別個に、独立に存在していることを明確にしなければならないのである。

第二に、物自体と現象との間にはどのような区別もないのであり、またあり得ないのである。なぜなら物自体から現象が発生し、現象のもとには必ず物自体が存在しているからなのである。しかしながら、われわれは現在の科学の発達の到達段階によって、またわれわれの認識能力の発達段階のゆえに、その物自体と現象関係とのすべてを認識することはできないではいるが。しかしながらそれは物自体と現象との差異を露にするものでは決してないし、物自体と現象との隔たりを表すものでも決してないのである。従って、ヒュームの言うように物自体は知る必要がなく、われわれはみずからの知覚の範囲に居て、物自体からは身を隔てなければならないというものでもなく、またカントの言うように物自体は彼岸の彼方にある信仰の対象であるとする必要はまったくないのである。ヒュームやカントのように人為的に、物自体と現象との間に隔たりを設けて、人間認識の拡がりに蓋をすることは、物自体と現象という現実性を捨象してしまう観念論独特の世界に迷い込んでいるだけなのである。

第三に、われわれの認識というものは日々物自体を追及して、物自体と現象との関係を解き明かしていつている弁証法的関係を理解しなければならないのである。物自体が不可知とかいうのは、いつに科学の未発達によるところがあるのであり、われわれの科学の発達による認識の質量深化が、われわれの未知の世界の解明を教えていることは日常的に体験するところである。異常気象の原因解明、天体の運行、生命体のいままで神秘といわれていたものの解明等々枚挙にいとまがないくらいなのである。われわれの認識は不変ではないのである。函数概念と

いった硬直したものでもないのである。次から次へと未知のものをわれわれ自身の努力で解明していつていることなのである。その未知のもの解明過程を哲学の立場からは、物自体と現象との関係解明と言うのである。無知識からわれわれの科学の発達等により知識を形成し、その形成された知識が現実にもふたたび応用されていくことにより、より正確で、完全な知識に近づいていく人類過程であると言うのである。

物自体と現象との関係についても、また物質と意識との関係においても、その関係を明らかにする場合において、哲学的な仕切りは必要ないのである。必要なのは、われわれのそとに存在する物質から、われわれの感覚が刺激を受けて、外界事物存在を反映し、そしてわれわれはその反映した外界刺激を脳神経細胞のはたらきで消化吸収して、新たな発想を創造的に作り出して、その新たな発想でふたたび社会や自然界にはたらきかけていつているということ。物自体と現象との関係も然り。何も物自体は不可知だとして、物質存在そのものに蓋をしてしまう必要性はまったくないのである。必要なのはわれわれが、われわれの前には物質的な未知の世界があるということを知っていることなのであり、さらにまたその未知なる世界に向かって物自体の現れである現象面を解明しながら、物自体である外界事物存在の全体像に接近していくことを知るだけなのである。われわれの認識は函数概念のように不変で、ひからびたものではなく、現実生活に似て、転化と流転の世界にあることを踏まえ、柔軟で可塑的で創造的なものである。物自体はカントのように不可知だとか、はたまたマッハのように函数概念だとかという仕切りをみずから設ける必要はまったくないのである。必要なのは未知なる世界がこの世にはまだまだ存在する、しかしながらその未知なる世界のことも、人間の認識の日々の深化により徐々に解明されていくことであることをわれわれは知っているだけなのである。

## 註

- (1) 種村完司著『心-身のリアリズム』, 青木書店, 1998年, 25ページ。
- (2) 種村完司著, 前掲書, 33ページ。
- (3) 種村完司著, 前掲書, 34ページ。
- (4) 種村完司著, 前掲書, 40ページ。
- (5) 種村完司著, 前掲書, 27ページ。
- (6) ジョン・ロック著, 大槻春彦訳『世界の名著27 人間知性論』, 中央公論社, 1968年, 81ページ。
- (7) ジョン・ロック著, 前掲書, 81ページ。
- (8) ジョン・ロック著, 前掲書, 83ページ。
- (9) デビッド・ヒューム著, 土岐邦夫訳『世界の名著27 人性論』, 中央公論社, 1968年, 418ページ。
- (10) デビッド・ヒューム著, 前掲書, 418ページ。
- (11) デビッド・ヒューム著, 前掲書, 422ページ。
- (12) エルンスト・マッハ著, 須藤吾之助, 廣松渉訳『感覚の分析』, 法政大学出版局, 1971年, 4ページ。
- (13) エルンスト・マッハ著, 前掲書, 4ページ。
- (14) 木田元「身体・感覚・精神」, 『新岩波講座哲学9 身体感覚精神』, 岩波書店, 1986年, 17ページ。
- (15) エルンスト・マッハ著, 前掲書, 12ページ。
- (16) エルンスト・マッハ著, 前掲書, 14ページ。
- (17) エルンスト・マッハ著, 前掲書, 14ページ。
- (18) エルンスト・マッハ著, 前掲書, 15ページ。
- (19) カント著, 篠田英雄訳『プロレゴメナ』, 岩波書店, 1977年, 80ページ。
- (20) カント著, 前掲書, 81ページ。
- (21) レーニン著, レーニン全集刊行委員会訳『哲学ノート』, 国民文庫, 1964年, 65ページ。
- (22) エルンスト・マッハ著, 廣松渉, 加藤尚武編訳『認識の分析』, 法政大学出版局, 1971年, 16ページ。
- (23) レーニン著, 寺沢恒信訳『唯物論と経験批判論』, 国民文庫, 1953年, 123ページ。